

展勝地風土記

Vol.32

令和2年7月22日

展勝地開園100周年記念事業実行委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課 ☎72-8279

展勝地開園100周年記念事業実行委員会、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史のこと、地理のこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。今回は令和2年10月23日に発行します。

『国見山―地質ガイド―』

よしかわ
吉川 一郎

国見山は北上の東方にそびえる標高200m級の山である。昨年の秋、童心会(※1)の会員を誘って歩いてみた。足の弱い人が多いので、憩いの森から亀の子岩まで歩いた。ほとんどの人が初めてだという。和賀川が北上川に合流する風景を上から眺め、とても感動していた。こんな身近なところに人々が感動する素晴らしいところがあるのだと改めて認識した。

国見山は平安時代の大寺院跡で知られ、多くの市民に愛される山である。国見山に関する文を依頼されて荷の重さを感じたが、国見山を毎週歩いていくと、地学の教員をしていたことなどでこのようなタイトルの文を書くに至ったものである。

国見山を歩いてみよう。山の東



写真1 胎内くぐりの露頭

側、極楽寺から登り国見山神社の横を通り胎内くぐりまで急登、過ぎると国見山大悲閣展望台が目の前だ。北に下り尾根の露岩帯の先は平和観音像だ。ここから尾根沿いに北に進み、珊瑚岳を経て西に下り、藩境界塚、亀の子岩を経て



写真2 平和観音像が建つ露頭

憩いの森に至る。ゆっくり歩いて2時間ほど、一般的な散策コースだ。

散策は四季折々楽しみがある。雪解けの早春にはオウレンの可憐な花が、春にはカタクリが咲き乱れヒメギフチョウが飛び交い、ウ

スバサイシンの葉に産卵する。遅れてチゴユリ、イカリソウがあちこちに咲き乱れる。桜やツツジとともに楽しみが多いのだ。夏は木陰になる散策路が心地よい。秋は紅葉、冬の雪道は神秘的だ。

さて、本題に入ろう。国見山を歩いて目につく岩を見てみよう。

まずは国見山神社の横の露頭(岩石が露出している所)だ。火山角礫岩だ。次に胎内くぐりの岩も火山角礫岩だ(写真1)。展望台を支えている大岩も、平和観音像を支えているのも火山角礫岩だ(写真2)。珊瑚岳、亀の子岩も同様だ。写真に示したが、いずれも人頭大の岩塊や角礫の間を細粒の物質(火山灰等)が埋めている。火山活動で噴出した碎屑物(岩塊、礫、火山灰等)が固結した岩石を火山碎屑岩とい

うが、岩塊や礫の割合が多い岩石を火山角礫岩または凝灰角礫岩と称し、火山灰の割合が多い岩石を火山礫凝灰岩という。

胎内くぐりの岩を観察してみよう。砕屑物が固結したものが脆くない。硬いのだ。他の露頭も同様。硬いから長い年月の浸食に耐え残ったのだ。砕屑物が硬い岩になる仕組みは続成作用による。堆積した砕屑物の間隙を埋めている水が堆積物の圧力で絞り出され、その隙間に二酸化ケイ素や炭酸カルシウムが入り込みセメントの役割をするのだ。その結果、強固な岩石となっている。

もう少し露頭を観察してみよう。



写真3 国見山神社周辺にみられる堆積模様

礫の岩質は、多くが安山岩(一部玄武岩)である。主に斜長石、輝石からなる火山岩である。角礫をよく見てみよう。少し角が取れているものが多い。これは火山砕屑物がそのまま堆積したのではなく、山体崩壊等で崩れ落ち堆積したことを物語っている。決して静かな環境ではなかったと推測される。ところが、国見山神社横の参道や鳥居の西の車道のり面に堆積模様がみられる所がある(写真3)。砂質の堆積模様がクロスしている。クロスラミナだ。流水により形成されたことを物語っている。また、黒岩の呉竹の採石場跡から植物の葉の化石が見つかっている。火山



写真4 狼洞地区にみられる溶岩

活動が落ち着いた時期に、生物が生息できる環境があったのだ。

国見山周辺の明神岳や阿古耶谷(口内地区)、北の胡四王山(花巻市)、南は江刺の北部まで類似の火山砕屑岩や溶岩が露出する。多くが類似の岩相だが、狼洞(花巻市東和町南成島)には柱状節理が発達する溶岩(写真4)が観察される。すなわち、かつてこの地域に巨大な火山活動があり、多量の噴出物を放出し堆積したということである。生成年代は新生代第三紀中新統のおおよそ2000万年前後と報告されている。岩石に含まれる放射性同位元素の崩壊から測定されるのだが、測定場所や報告者により測定値にバラツキはある。

国見山に露出する火山角礫岩は強固な石である。硬く割れ目が少ない。これは樹木にとって根が張りにくく生育に難しい環境と考えられる。確かに尾根筋は樹木が少なく歩きやすいのだ。今は植物に覆われている国見山だが植物をはぎ取ると険しい岩山の相を呈する。まさに里からそびえる霊山なのだ。その雰囲気味わえる晩秋から初冬の国見山もお薦めだ。

終わりに、国見山の岩相は変化

が少なく研究報告も極めて少ない。大石雅之氏(※2)には現地で貴重なご教授をいただいた。拙い文になってしまったが、市民の宝である国見山を一人でも多くの人々が関心を高めていただけたら幸いである。

※1 黒沢尻第1区老人クラブ

※2 岩手県立博物館研究協力員
岩手大学非常勤講師

※参考資料 北上川流域の自然と文化シリーズ(23)「郷土の生い立ち―地質時代統編―(2002年3月発行・北上市立博物館)

筆者プロフィール

吉川 一郎

1947(昭和22)年北上市生まれ。福島大学卒。県内の高校で理科(地学)教員として勤務。退職後、北上コンピュータアカデミー勤務。現在、北上情報処理学園顧問、童心会会長、北上山たびの会世話人、楊名時太極拳準師範。